

自分をさがす 旅にでよう

やすら樹

No.

61

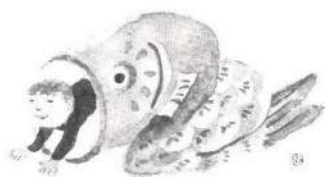
2000 MAY

特集・お二人を偲ぶ

追悼 吉本キヌ子先生・柳田鶴声先生



発行 自己発見の会



とときどき
時時の花は咲けども何すれぞ

母とふ花の咲き出来ずけむ

(西へ向かう道筋で折々に花は咲いていたが、
どうして母という花が咲き出なかったのだら
う。こんなに母を想っているのに……)

はせべの
丈部 真麻呂 ※

※丈部真麻呂・八世紀半ばの防人

内観とは

内観とは、身近な人々（母または母親代わり
に育ててくれた人、父、配偶者など）に対する
自分を見つめるために、①していただいたこと
②してさしあげたこと③迷惑かけたこと、につ
いて、具体的な事実を過去から現在まで調べる
方法です。

内観は新しい自己を発見し、人生をリフレッ
シュする自己啓発の方法として役立っていま
す。

さらに非行、不登校、夫婦の不和、うつ状態、
アルコール依存など心のトラブルに対する心理
療法としての価値が認められています。

現在、日本各地やヨーロッパに内観研修所が
開かれ、一週間の研修の世話をしています。ま
た一日内観や二泊三日の短期内観、家庭や学校
で行う記録内観などいろいろな形態の内観が開
発され、内観法は新たな展開を見せています。

特集・お二人を偲ぶ

追悼とは感謝・報恩

突然の悲報が、春雷の閃光のように私たちを驚かせてから二カ月がたちました。

一月三〇日に柳田鶴声先生逝去、享年七〇歳、そして二月三日に吉本キヌ子先生逝去、享年八一歳。

今あらためて生・老・病・死の無常さを思い、更に、しみじみと、生と死の意味を自らに問うこと切なるものがあります。

まことに吉田兼好の「死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり」（死はいつの間にか後ろに肉薄している）の感懐を深めます。

三月一二日に柳田先生を偲ぶ会が行なわれ、ゆかりの方々のお話を拝聴しながら私の脳裏に「内観者は死をどう受け入れるか」の想念が去来するのを禁じえませんでした。

この特集記事の中でも伝えられているように、樞の中のキヌ子先生のお顔は美しく、また、柳田先生のお顔はやすらぎにみちていたとうかがい、生かされて生きる喜びと感謝のご生涯を賛仰し、感銘しております。

キヌ子先生の常に変わらぬご温顔からの励ましの言葉、また柳田先生の誰へだてない親身のこもる語りかけに、どれだけ多くの方々が目覚めさせていただいたことでしょうか。お二人への追悼とは感謝であります。

大和郡山の内観研修所で起床時に流されていた音楽がありました、それは「恩徳讃」という親鸞聖人作の感謝の歌なのでした。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし

現代の立場で「如来大悲」を「私を包む宇宙の愛」、「師主知識」を「先師の導き」として味わうことができましょう。

旅立ってしまったお二人の先生への報恩を、私たちは後に続く方々にむかって捧げることを誓い、内観の志を更に新たにすることであります。

そして感謝できることを心から喜びたいと思います。



吉本キヌ子略歴

- 大正 9 年 (1920) 3 月、父・森川巳之治郎、母・リウのもとに長女として、奈良県大和高田市に生まれる。
- 昭和 1 2 年 (1937) 3 月、奈良県立高田高等女学校を卒業。
5 月、吉本伊信と結婚。
- 昭和 2 8 年 (1953) 奈良県大和郡山市に内観道場開設。
- 平成 9 年 (1997) 8 月、脳梗塞で倒れ入院。
9 月、退院。
- 平成 1 0 年 (1998) 1 月、脳梗塞のため再入院。
6 月、退院。
- 平成 1 2 年 (2000) 2 月 3 日、享年 8 1 才 (満 7 9 才) にて死亡。

内助の功



自己発見の会会長 長島 正博

私は一九七六年から九年間、伊信・キヌ子先生ご夫妻の下で住み込みの助手として寝食を共にする幸運に恵まれました。その間、年中無休で内観者のおられない日は一日もなく、一万一千人以上の方が内観されました。その方々をキヌ子先生は全身全霊を捧げてお世話されました。当時の私は若かったので無我夢中でしたが、私も次第に先生の年齢に近づくにつれて、どれだけ大変だったのかと今頃になって思い返しております。

先生には子供が、五人（七人のうち二人は幼くして死去）と孫が一八人おられました。キヌ子先生は新しい孫が生まれると当然、会いに行きたがられます。ところが伊信先生は「大勢の

方が内観しているのに、それをほっといて孫がかわいいからと、行っておれば内観が廃れてしまう」と許可されませんでした。キヌ子先生は「私達もいずれ年をとって動けなくなると、子供達の世話にならなくてはならないのですから子供が忙しくて困っている時は、手伝いに行つてやらなくては……」と、重ねて言われました。しかし、伊信先生は「たとえ年老いて動けなくなり、糞まみれになっても、内観のためにそうなるのならば自分は本望だ」と言われますのでキヌ子先生はあきらめざるを得ませんでした。

一七才で伊信先生と結婚され、長年一心同体で暮らして来られたにもかかわらず、キヌ子先生は伊信先生に対していつも「何かして欲しいことはないですか」と尋ねておられました。それについてキヌ子先生は「夫に死なれたら一番困るのは私なのだから生きていてさえいれば、どんな苦勞でもさせてもらいますよ」と言われ実行しておられました。

キヌ子先生も結婚当初は普通の家庭生活を夢見ておられ、時々伊信先生と衝突されることもあったようですが、その度に伊信先生から「どちらが間違っているか、実家へ帰って親に聞いて来い」と言われたそうです。キヌ子先生の実母は伊信先生が最深の内観者と絶賛された森川リウさんですから、キヌ子先生は諭されて戻って来ざるを得ません。それでキヌ子先生は「今日の日のあるのは親のお陰です」と言って感謝しておられました。

キヌ子先生が六二才のおり、乳癌の手術で入院されましたが、その時、伊信先生も糖尿病の検査を受けるためにと一緒に入院してしまわれました。そして伊信先生は私に内観予約者に対して「当研修所はいつ再開するかわからないので、他所の研修所へ行ってほしい」と電話で連絡するよう指示されました。今までの伊信先生の生き方からは、内観を断るということは想像もできませんでした。この時、私は伊信先生に

とってはキヌ子先生あつての内観なのだなと思
い知らされました。

キヌ子先生がベランダで洗濯物を干しながら「こんなお天気の良い日に真っ白い洗濯物を干している、女に生まれてきて良かったと思うわ」と満面笑みをたたえて言われました。こんなささいな事にも歡喜しておられる姿に私は大変感動しました。

これらのエピソードは、伊信先生がいかにキヌ子先生を愛し、キヌ子先生もそれをしっかりと受け止められてきたかという証なのでしょう。伊信先生がキヌ子先生を呼ばれる「お母ちゃん」という声を聞かれた女性の内観者が「私も一度でよいから夫からあんなふうに呼ばれてみたい」と述懐しておられました。

来世も夫婦になりたいと言われていましたので、あの世でも仲睦まじくしておられる事でしょう。この世に内観を確立するために、内助の功を尽くされたキヌ子先生に心より感謝します。

「私はおまかせでした」

日本内観学会会長
指宿竹元病院院長 竹元隆洋

一、波瀾万丈の人生

内観一筋だった吉本伊信先生を支えて生きてキヌ子先生の一生は、そのまま内観一筋の人生であったと思います。キヌ子先生なくして伊信先生はなかったのかもしれない。あのふくよかなお顔に、あのやさしい瞳は、まさしく菩薩さまでした。振り返ってみると、キヌ子先生と伊信先生の生涯は波瀾万丈の歴史でした。吉本家と森川家はすでに縁戚にあり、キヌ子先生が六歳の時、伊信先生と初対面しておられて、キヌ子先生が一五歳の時、一九歳の伊信先生が見初められたと言う歴史から始まっているようです。未だ伊信先生が「身調べ」を成就できない

でいる時、一八歳だったキヌ子先生は「身調べ」に取り組み、食わず、飲まず、眠らずの修行で宿善開發されたのでした。その二ヵ月後にお二人は結婚され、間もなくして森川出張所を継いで、大阪に出られました。キヌ子先生に「身調べ」で先を越された伊信先生は、その半年後、昭和一二年一月一二日に四回目の「身調べ」に挑戦して、見事な転迷開悟にいたったのでした。この時が内観の誕生とも言うべき記念すべき時となったのでした。その後の伊信先生の内観普及活動は狂気に近いもので、深夜遅くまで村々を歩きながら、家に帰っては、朝一番電車で出かけるという日々を啖血して倒れるまで一二年間続けられました。伊信先生の一二年間は、森川産業を拡大し各地に支店を開くすさまじさでした。闘病中にも一二ヵ所の支店をつくり、各支店に信仰相談所を設けて内観指導を続けられました。結核が治った頃、社長を引退し、大和郡山内観道場を開設されました。それからの

歴史は、お二人で手に手を取って、まさしく内観一筋の努力を続けられ、各界に内観が加速度的に普及発展する隆盛の時代を迎えることになったのでした。

二、六時間のインタビュー

一九九六（平成八）年、キヌ子先生が七七歳の時、私は息子を内観研修所に連れて行き、その時、私も二泊して、キヌ子先生にインタビューをしました。九〇分テープ四本、六時間の記録をとったものが私の手元にあります。吉本伊信の妻キヌ子の実像をいくらかでも写し取りたいと思い、妻キヌ子の目を通して見た吉本伊信像にせまりたかった思い、さらに、内観の成長過程をすぐそばで見続けた証人の目に、お話をうかがいたかった思いでした。キヌ子先生は内観研修所のあの居間で、私も一緒に夕食を食べたり、朝食を食べたりしながら、面接に行ったり、内観者の食事の準備をしながら、私のインタビューの相手をしてくださいました。伊信先

生との人生は不思議なご縁でしたと言われる。何もできない私のようなものをもらっていただけで、私は先生にすべてをおまかせだったので、と言われる。先生と言われたり、主人と言われたり、その時々のお話の内容で見事に区別しておられました。

三、つらかった時代

私は最初から厳しい質問をしました。「奥様の人生で一番つらかったと思う時代はいつ頃でしたか」と、「主人が内観に一生懸命になった時はつらかったです。夜は出て行って、いつ帰るか分からず、朝一番には出かけていましたから」と、まだ一八歳の新妻が、夜も一人ポツンとしていた姿が思い浮かびます。「淋しさがつらかった」と言われた言葉には女としての真実味と夫の身を案ずる妻の心がありました。「だけど今思えば次々に子供も生まれ、とてもすばらしい玩具を与えられていたのですから、私の心が貧しかったのですよ」と目を細くして笑わ

れたのでした。私の「身調べ」は浅いものでしたからと声も小さくなりながら、主人と私の母（森川リウ）は精神的にとても高いところでありあえる求道者同志で、私はその間に入り込むことはできませんでした。だから私は母にずっと嫉妬していたのです。と言う赤裸々なお話には、私も身が引き締まりました。ここで、こうして文章化することさえ戸惑いながら、しかし、この三人の生きざまのすごさは、語るに値するものと確信します。

四、「内観はまちがっていない」との確信

私はさらに、もつと意地悪な質問をしてみました。「キヌ子先生のお父様が設立し育てられた森川産業を伊信先生は受け継がれながら、昭和二八年には、それをポイと捨てて、内観だけに打ち込まれた、あの時、森川家の娘として、伊信先生のやり方に反発はありませんでしたか、男のロマンのために、父の会社を捨てる夫をどう思いましたか」とせまってみました。キ

ヌ子先生は、私には商才もないし、何もできませんから、ただついて行くだけなのですよ、だけれどあの時、長女は学校をやめて働きに出ようかと言ったり、次女は中学生でしたが、駅前にアルバイト求むを見て、私も仕事に行こうかと言ったのです。私よりもよほど子供たちの方が真剣だったのですね、と笑われる。しかし「私も内観はまちがっていない」と確信してしましたので夫にはついていけたと、キヌ子先生のリンとした心意気が溢れ出たのでした。その確信こそ「身調べ」の体験者であり、「内観」の体験者の大きな自信と勇氣と溢れんばかりのエネルギーであったのだと思います。その確信と同時に伊信先生が結核の病み上がりで身体が弱かったこと、さらに内観を指導しながら商売をしていると従業員が不正をしたり税務署にひっかかったりしたら大変だからというのも現実的な理由だったとのこと、波瀾万丈の人生を、その時その時の価値ある判断でまちがいに確信を

もって行動しておられるのに、キヌ子先生は自然の流れにおまかせして来たのですと言われる。

五、夫婦愛

伊信先生の思い出は限りないと思うのですが、どんなことを思い出されるかと尋ねると「わしは何も出来んから、面接だけでも行つてくるから、と言いながら面接に行つていましたよ」と言うのが思い出の筆頭でした。つましい夫婦愛のにじむ思い出話ですが、夫の死後に妻が思い出すすばらしい光景であり、夫の人柄をしのぶ妻のやさしいまなざしが印象的でした。さらに「奥様は、伊信先生のように講演などはなさいませんか、門前の小僧とか言いますが」と聞いてみると、主人と私は正反対でした。私は何もできなくて、主人におまかせだった、だからかえつて良い組み合わせだったかもしれないと言われる。しかし何もできないふりも大きな才能かもしれないねと言うと、口を手でふさぎながら否定しておられた。

六、内観一筋の心

キヌ子先生が脚の関節の痛さをこらえながら面接を終えて居間に入つて来られた時、私はまたもや意地悪な質問をしました。「もうお年ですから、内観指導もやめて、ゆつくりしたいと思いませんか」と、ところが「内観に来る人がいなかたりすると淋しくて。食事を作つたりする楽しみもあるんですよ。誰もいないと淋しいんです」と言われる。

最後に「伊信先生が昭和五一年に脳血栓で倒れた時、私は二回目の内観中で、目の前で意識消失した先生を見て、先生も人間なのだ、内観を先生の名人芸にしておいてはいけないと、内観学会の設立を呼びかけたのでした。先生が倒れたことが大きなきっかけになつていたので」と話しました。キヌ子先生は「いつまでも生きていると思えば、のんきにしてしまいますからね」としんみり語られました。キヌ子先生との出会いの全てに感謝します。

合掌

キヌ子奥様

白金台内観研修所所長 本山陽一



柩の中のお顔は少し小さくそして美しくかった。

その美しいお顔を拝見して、やはり奥様は二年間余りの闘病生活のあいだ内観をなさっていたのだ、と思った。ほとんど無意識の状態でも無意識に内観ができる境地になっておられたに違いない。

吉本伊信先生も三四才からの五年の闘病生活のあいだ内観三昧の生活をなさっていたと想像される。本物は逆境になればなるほど成長する。生きているあいだに少しでもその境地に近づきたい、とそのお顔を拝見してあらためて思った。その美しい死に顔はまた、すでに魂の抜け殻になった肉体を強く意識させた。キヌ子奥様は

残された肉体をさらりと脱ぎ、すでに次の世界に忙しく生きておられるように感じた。伊信先生と同じ世界に行かれたのかなあ、と素朴な感慨が湧いた。

キヌ子奥様はまるで吉本伊信という人物を支えるために生まれて来られたかのようなのである。キヌ子奥様だけでなくキヌ子奥様がお生まれになった森川家全体が吉本伊信先生を支えた。内観普及の資金集めに始めた商売は、森川家の店を引き継いだものである。

奥様のお母様はあの森川リウさんである。吉本伊信先生をして「今までで最も内観が深かった人」と言わしめた人物である。このリウさんがお生まれになった福本家も、代々信心深い家柄であったようである。リウさんの父福本伝十郎さんも御法話を聴くために冬でも毎晩着物を頭の上のせて当時橋のなかつた吉野川を歩いて渡ったという逸話の持ち主であり、リウさんの母ヨシノさんも熱心な信者だったらしい。

キヌ子奥様のお父様は森川巳之治郎という方

でこれまた篤信な人として有名であった。この方もさまざまな逸話の持ち主である。村で評判の篤信家巳之治郎さんのもとにはお金に困った人達が、自分の土地を買ってくれないかと相談によく来たらしい。そんな時、巳之治郎さんは土地も見ずに相手の言い値で買ったという。そんな気性の巳之治郎さんをよく知る村の人達が「巳之治郎さんをだますと承知しないぞ」と言い始め、巳之治郎さんをだますと村八分になりそうな気配になった。そこで巳之治郎さんに土地を売る人達は結局自分の持っている一番いい土地を手放すようになった、ということである。私が巳之治郎さんに感動したのは「この世で誉められるよりあの世で仏さんに誉めて欲しい」という気持ちで生きておられたという話を知ったときであった。伊信先生の内観研修所にお見えになったときも、いつもそつと研修所のおちこちの修理をしていつのまにか帰っていか

れたそうである。

キヌ子奥様はそういうご両親のもとに五人姉妹の長女として祝福されてお生まれになった。六歳の時、当時十歳の伊信先生に初めて出会い本人の意志より先に親同士が入るといふ運命的な結びつきをし、自らも女学校卒業後すぐ信心獲得をする。正に生まれながらの内観の申し子といえる。

その後の人生もご両親、夫といった深い内観者に囲まれながら約六〇年間内観者さんのお世話をなさった。現在の内観研修所を開設されてからでも約四五年間二万人から三万人に及ぶ内観者さんの食事のお世話等を朝四時半から夜九時まで毎日毎日なさったのである。そんな生活を続けながら私生活でも目の不自由な吉本伊信先生のお母様をお世話なさり、七人のお子様にも恵まれた。お二人を幼くして亡くされるといふ悲しみを乗り越え、五人のお子様を立派に育てあげられた。五人のお子様は独立された後は、

生活の全てが内観一色になった。こんなエピソードがある。キヌ子奥様が倒れられたときのことである。留守番に來られたご家族が外出するために玄關のカギを閉めようとしたところ、いくら探してもカギが見当たらない。カギだけでなくカギ穴も見つからない。この家の玄關は外からカギを閉める構造になっていなかったのだ。その時初めて気がついた。この四五年間一度もこの家を留守にしたことがなかったのだということ。やむを得ずお二人が外出する時はどなたか留守番を頼んで内観者さんに迷惑をかけるないようになさったようである。改めてご夫妻の内観一筋の生活を再認識なさったようである。

私の記憶にある奥様はほとんど台所で働くお姿である。ある時こんなことがあった。私がお膳を用意していると突然大きな炎が上がった。奥様が揚げていた天ぷらの油が側にあったタオルに燃え移り、その炎が瞬時に天井近くまで広がったのだ。私はあわてて火をとめようとする

と奥様は、少しもあわてずタオルを何度が思いつきり叩きつけてその炎を消し、何事もなかったかのようにまた料理を続けられた。時間にすると一瞬のことだった。私はあまりの手早さと奥様の物事に動じない態度に呆氣にとられ、ただただ感心させられた。

またこんな事もあった。台所に入ろうとしたところ、数十人分の米を研いでいる奥様の後ろ姿が見えた。私は思わず立ち止まりその後ろ姿に釘付けになった。米を研ぐ姿の迫力に動けなくなつたのだ。全身が小刻みに上下に揺れ凄まじい音で米を研ぐ。足の先から頭のとつぺんまでを総動員して身体全体をリズムミカルに上下に揺らし、その力を利用して手を動かす。全身で一心不乱に米を研いでいるお姿はまさに真剣勝負といった風情であった。奥様にとって台所は修行の場であられた。四五年間の毎日毎日が凄まじい自己との戦いの場であられたに違いない。

そして昼間の殺人的な忙しさが終わると夜に

は枕元で日常内観を続けられるのである。私は夜控え室にいるとよくご夫妻の部屋から嗚咽が聞こえてきた。最初は何の声だかわからなかったが、やがてそれは奥様の日常内観の声だと気がついた。私はその声で道を求める人の厳しき、凄まじさを教えていただいたのである。

これらの行動は誰にも言わず誰にも知らせずおこなう奥様の陰の部分で、表面はやさしくおつとりと「ハイハイ」といつも伊信先生にお仕えしていたのである。私は元来、人間が呑気に出来ており、よくお風呂の水をあふれさせたり、ガスのスイッチを切り忘れてお風呂を沸騰させたりした。しばらく経ってそのことに気づきあわてて風呂場に飛んでいくと、水道の栓やガスのスイッチがチャンと閉められていて風呂の状態が丁度よい加減になっていたことが何度もあった。奥様がそつと後始末してくれたものだ。しかも私に会ってもそのことに一言も触れないのである。そういう人であった。

キヌ子奥様は心より伊信先生を尊敬されていた。御夫婦仲は七〇歳を過ぎても下手な新婚さんよりも睦まじく、お二人の会話はお互いを尊敬し、感謝し、いたわりあった内容にあふれたもので、側で聴いている者の心をなごませた。訪れた内観者さんの中にはお二人の会話を聴かせていただけただけでここに来た価値があったという人やお二人の会話を聴いて自分たち夫婦とのあまりの違いにショックを受け、突然泣き出したりする人も多くいた。

奥様はよく私に「先生のお話をよく聞いておいてくださいよ。後世の人に来るだけ正確に教えを伝えるためにもどんどん先生に質問しておいてくださいよ」と言ってくださった。

奥様は本当の意味で幸せの人であった。私は今奥様の私に対するご忠告を思い出している。「順調な時ほど気をつけなさいよ。私はあなたに逆境の時は心配していません。順調な時ほど危ないですよ」奥様ありがとうございました。

われなしへの道

多布施内観研修所
東横イン内観研修所
池上吉彦

ふと思ひ立つて東山診療所の清信氏のところに居られるキヌ子奥様にお会いするため、まず内観研修所を訪れると、正信氏が自分も行くところだからと車で送ってくださいました。

ベッドに体を縮めて寝ておられる奥様はお話するのは無理ながらふくふくと健康そのものの感じでした。その縮めた手足を正信氏が声かけしながら撫でたり伸ばしたりされます。私も片方のおみ足を伸ばさせていただきました。まだまだ弾みもある滑らかな皮膚です。このお体で、生涯を内観の縁の下の力持ちとして捧げて来られたんだなあと、感慨一人のものがありません。そしてこうしておまかせの姿勢で寝ておられるのは、ひとえにお子達の為なのだと感じました。



お葬式の日、長女の信子様
に連れられて祭壇の裏から棺
の中を拝ませていただきました。
すうつと痩せてすこぶる
美人になっておられました。
お師匠様のもとに行き着かれ
た安らぎです。信子様は、母
の病のお陰できょうだい仲良
くなりましたとおっしゃいました。やはりお子
達の為に、病という形で親しく最晩年を接して
来られたんだと思わさせていただきました。何だか爽
やかな気分になりました。

お師匠様がみまかられた時、「私もついて行
きたいが、今逝くと先生とは行く先が違うので
もっともつと頑張つて同じところに行けるよう
になつてからと思ひ直しています」と目を潤ま
せながらにつこりされましたが、以後も内観専
一に生きられ最後にはお子達にも十分尽くし尽
くされ「同じところ」に行けるようになられた

のだなあと、葬送勤行の響きの中で思い、嬉しさが心の底からこみ上げました。

私がキヌ子奥様と初めてお会いしたのは、当然のことながら七八年四月に集中内観に訪れた時でした。一日間坐って、感激の余りテープや本を買い込み過ぎて、奥様に電車賃五千円をお借りしました。何だか金を貸すのも嬉しそうな様子で、春風のようなお方だなと思ったことでした。その後、妻がお二人の寝室の隣部屋で内観したことがあって、キヌ子奥様は一日の事が済まされると足早に戻られ、布団を敷く音がしたかと思うとそれこそバタンと寝られ、ナンマングブンマンダブというお念仏が二声、三声、するともう寢息を立てておられた、と話してくれたことがあります。日々を精一杯に生き、何のわだかまりも心配もなく寢床に入られるのでありましょう。そういえば奥様が面接に来られた時「無邪気に天真爛漫に生きれば榮ですのにねえ」と言われたことがあります。バツサリ

袈裟掛けに斬られた思いでした。今もわが心に反響し続けています。

また、よく思い出す情景ですが、お師匠様が応接室のピンクのシクラメンを見ながら、ちょっとはにかんで、家内はこのうつむき加減に咲いているシクラメンみたいな人だ、と言われました。シクラメンの根のどっしりとした力強さも奥様そのままです。来世も一緒になりたいとお師匠様は口癖におっしゃり、奥様のほうは夫のことを、先生、先生と呼んで謙虚にお仕えになったそのお二方の姿は、ちょっと余人には真似の出来ぬところでしょう。

このごろ私は、自分の内観は目におおいを着けて走る馬車馬に似てたなあと振り返っています。私の内観は視野狭きものかも知れないと。しかし、それゆえにこそ「わが憧れ」に届き得たとすれば頑固もまたよしです。

私の内観は、お師匠様の宿善開発の折のご述懐である「自分が世界中で最低最悪の人間だと

心底から思えた時、転げ回り泣き続けるほどの喜びに遇えた」という、その喜びへの憧れと、「人は己を知る為のみに生まれ、その近道は内観である」というお言葉を丸呑みにした内観です。世界一の悪人である己に遇えれば、憧れの「喜び」に遇えるのだ、という一筋道です。

馬車馬にたとえましたが、何と歩みののろい馬であつたらう。憧れにたどりつく前にお師匠様を失いました。途方にくれて呆然たる私の前に差した光は、ある内観テープから聞こえたお師匠様のお声でした。要約すると「わしが死んでも本人の機が熟したら家内に随つききなさい。家内は全てを心得ている」というものです。こうしてまず五四歳の夏、次に五六歳の冬、断食断水断眠でキヌ子奥様にお手引きいただきました。五六の時、小用に立ったつもりが、気がついてみると屏風と共に倒れていて、体力的限界を感じ、今生では無理かと半ば諦めました。

しかし定年退職を迎えるとともに、多布施内

観研修所を新築し、研修所長専一の生活に入る決心をした時、「宿善開発」を求めておいでになる方に対応できない所長では看板を偽ることになるといふ思いが強ク兆し、唯一の伝え手であるキヌ子奥様の肉の命の消えぬ間という切迫した思いと相まって、九六年四月二日、四年半ぶりの集中内観に挑みました。不思議なことに往路すでに「大魚が釣れる」という予感が体内に満ちていました。

かつて奥様は、お師匠様と母上リウ様とを比べて「先生は人を導くのが上手でしたが母はさっぱりでした。でも居るだけで皆さん喜ばれてでした」と、深い内観の人にもそれぞれ持ち味のあることを教えてくださいましたが、奥様自身は居られるだけでほのぼのとしたものを感じさせる一方、面接は口調の柔らかさと裏腹に峻厳苛烈で身がすくみました。

それほどのお導きをいただいているのに「死ぬのが怖い」になつてくれません。食わなかつ

たり眠らなかつたりの断続で二〇日目頃から結滞たぐが始まり、さては覚めたら骸かと思つても恐怖はありませぬ。肉体のそれと後生大事の「死ぬのが怖い」は全く別物です。それでも三週間過ぎた頃から「後生の一大事」も「地獄一定」も、この「死ぬのが怖い」も、ひたすら内観の底に湧き始めました。奥様は「こつちから掴むもんじゃなしに、自分の内心から出てくれるもんですね」と、私の体験を見透かすように言つてくださいました。「掴むもんじゃなしです。自分から生み出すもんですよ。お産と一緒に十月十日経てば生まれる。向こうにあるものを掴むんじゃないんです」「自分をしっかり見詰めること、無常を取り詰めながら」。

「内心から出て」き始めてから一〇日余りの長い陣痛でした。キヌ子名産婆は妊婦のいきみに任せながら痛烈な助言で分娩を促進してくださいました。かつて一八歳の時の魂の夜明けの感想をリウ様に「お産の百倍の苦しみであり百倍

の喜びです」とお伝えになつたキヌ子奥様です。三〇日過ぎ。奥様「度し難いですなえ」。私「助からないということですね」。奥様「助かつて欲しいですけどなえ」。

三三日目の夕方。「縁なき衆生は度し難しと言いますからねえ」。やさしい口調でボンと突き放されます。しかしその次の面接で。“その時”はやって来ました。拳をにぎりしめて泣いている私の頭の上で、キヌ子奥様がしきりにうなづき、ひそかに涙ぐんでくださっている気配です。嬉しさに泣けて泣けて止まりません。求道一八年、遂に、魂に明かりが点つたのです。待ちに待つたこの日でした。

「本当に内観したら自分のそういう我が全く無くならんならん。本当の無我と言いますかそれが内観の本当の姿なんですよ」と奥様は言われました。これからは「われなしへの道」を憧れて進みます。どうかキヌ子奥様、伊信お師匠様とごゆつくりなさいませ。

合掌

内観の母はキヌ子夫人

大阪大学大学院教授 三木善彦

吉本キヌ子夫人の告別式は、ご親戚と近隣の方々と日本内観学会や自己発見の会の参列者の見守る中、しめやかに行われました。その日は冬の最中というのに、寒風もなく温かな陽が射す穏やかな日で、故人のお人柄そのままのようでした。

日本内観学会から生花一对を捧げ、私は事務局長名で次のような弔電を打ちました。

「内観法の父は吉本伊信先生であり、内観法の母はキヌ子先生でありました。キヌ子先生の心のこもった食事と温かな笑顔に、どれほど多くの内観者は救われたことでしょう。」

内観法の実践と研究を進めるために設立され



た日本内観学会の名誉会員として学会の成長を心から喜んでくださり、私たちの大きな励みとなりました。

この世からキヌ子先生の姿が消え

ても、私たちの心の中から消えることはありません。あの世に逝かれたら、伊信先生が『おかあちゃん』と再会を喜んでくださり、あまりの仲睦まじさに、他の仏さまたちからきつとやらやましがられることでしょう。

内観法の発展に力を尽くす私たちを、今後とも見守ってくださいますようお願いいたします。

★ ★ ★

内観の経験者が口をそろえて言うことは、研修所での食事の楽しみ。キヌ子夫人のお作りになる食事は「温かいものは温かく、冷たいものは冷たく」という原則を貫き、ほんとうにおいしいものでした。多いときは三〇人以上の食事を用意するのですから、その苦労は大変ですが、奥様は「私は面接より料理の方が好きですから」

と楽しんでなさっているようでした。

昭和四二年に私が研修したころ、温かいカレーライスには冷たい牛乳がついていて、その組み合わせに最初は戸惑いましたが、意外によく合っていて、それ以来カレーライスを食べる時、私は必ず冷たい牛乳を飲むようになったものです。

キヌ子夫人による面接は日に一、二回でしたが、内観報告に黙って静かに耳を傾けてくださいました。特に何か意見とか感想をおっしゃったことはありませんが、それだからこそ、安心して話せ、ほっとする面接でした。伊信先生は厳しい面がありました。奥様は何を言っても受け入れていただける優しさを感じて、面接を心待ちにしたものです。

★

★

★

これは後日誰からか聴いた話ですが、東京で伊信先生の講演会があり、奥様も同行なさり、「二泊して久し振りに東京の孫の顔を見られる」

と楽しみにしておられました。しかし、講演会が終わると伊信先生は内観一筋の方ですから、「内観者が待つておられるから」とさっさと奈良に帰ることになり、奥様は残念な思いをなされたそうです。

そういえば、ある夏の日、私が研修所にお邪魔していたときのことです。里帰りでお子様やお孫さんたちが大勢来られたのですが、研修所は年中無休でしたから、皆様は奥の倉庫の部屋に入られました。奥様は一刻も早く、お子様やお孫様の顔を見たいと思っていられる様子がありありとしていました。しかし、伊信先生より先に行けないとお考えになり、「孫たちが会いたがっていますから行ってやってくださいな」としきりに勧められました。でも、伊信先生は内観以外には関心がない方ですから、内観者との面接などに忙しくなさり、一向にそうなさいません。

しかし、奥様に強く促されて、先生はしぶし

ぶ重い腰を挙げ倉庫の方に行かれましたが、数分もしない間に「挨拶してきました！」と、さつさと居間に帰ってこられました。これでは奥様もゆつくりと孫たちの相手をする口実ができず、その時の奥様の残念そうな顔！

「内観、第一。その他は余計なこと」の伊信先生に仕えておられた奥様は、「伊信先生、第二」で、ご自分の欲を抑えてすべて伊信先生に従っておられました。このような奥様がいたからこそ、年中無休の内観ができたのです。おしやれをしたり、観劇も家族旅行もなさった気配はありません。一年中、ひたすら内観者の世話をなさっていました。伊信先生も「内観屋ができたのは、家内のお陰です」とよくおっしゃっておられました。傍らで見ている私などは、ゆつくりとお孫さんの相手もできない奥様を密かにお気の毒に思ったものです。

しかし、伊信先生の晩年のころ、「先生が亡くなったら、一番困るのは私です」とおっしゃ

り、先生を尊敬し、先生と生涯を共にしたこと
を心から喜んでおられました。このようなご夫
妻がいたからこそ、危うく消えようとしていた
「身調べ」の伝統が内観として現代によみがえ
り、後世に誇る自己探究法として発展してきた
のです。それは現代の奇跡のひとつです。

★ ★ ★

私たちが奈良内観研修所を始めたころ、内観者のお世話に慣れていませんから、妻の潤子は困ったときには、キヌ子夫人によく電話して教えていただきました。とくに私が勤めに出ていて、連絡がつかないとき、相談相手になってくださる奥様の存在はとてありがたいものでした。

例えばあるとき、内観者のひとりが内観が進まず、袋小路に入って身動きがとれなくなりました。切羽詰まった潤子が電話で相談すると、キヌ子夫人はやさしい声で「ついていけばいいのですよ」と教えてくださいました。なんでも

ないこの一言で氣負いがとれて潤子が落ち着いて面接すると、内観者も落ち着いて内観が進展したこともありました。

奥様は朝早くから一日中、食事の用意や布団の襟付けなど寝具の世話に、小走りに動き回っておられたのは先程も申しました。お年を召して足を悪くなさってからは、お疲れになったときは、居間でころんと横になっておられました。それを見た潤子は、疲れたときはそうしてよいのだな、と安心したとのことでした。

★

★

★

晩年は寝たきりになられ、ほとんど明瞭な意識もなくなり、うとうととなさっていました。私は「これほど世のため人のために尽くされたのに、このような最後を迎えるとは、神様や仏様もひどいよ」と思ったものです。

しかし、だんだんと「人は老いて病氣になり死んでいくのは自然の姿で、人のために生涯を尽くしたとしても、ぼっくりと死ねるなどとそ

の見返りを期待するものではないのですよ」という当たり前のことを教えてくださっているのだと思うようになりました。

そういう意味で、内観は奇跡を起こすものではありません。それを期待すれば、内観は怪しげな宗教に成り下がってしまいます。

それよりも、キヌ子夫人の付添いさんがそつと私に告げてくださった言葉が心に残っています。

「私はいろいろな病人さんを見ていますが、このようにご家族の方々が心をこめて世話をなさっているのを見たのは初めてです。ほんとうにこの病人さんは幸せな方です」。

うとうとしながら、キヌ子夫人は伊信先生と過ごした人生を振り返り、温かなご家族に囲まれて、安らかにあの世に旅立っていかれたのでしょう。そして、あの世で伊信先生と再会なさり、ゆっくりとした時間を楽しんでおられることでしょう。



柳田鶴声 略歴

本名 柳田鶴治（やなぎだつるじ）

- 昭和 5 年（1930） 4 月、秋田県仙北郡仙北町に生まれる。
地元の小学校卒業後仕事を転々としながら独学10年目で大学入試検定試験に合格。
- 昭和 3 2 年（1957） 3 月、富士短期大学卒業。
サラリーマンを経て会社経営にあたる。
- 昭和 5 1 年（1976） 10 月、東京日本橋浜町に於いて、内観サークル希望クラブ創設。
- 昭和 5 6 年（1981） 7 月、栃木県塩谷郡喜連川町に瞑想の森内観研修所創立。
朝日カルチャーセンター講師や、各大学・病院・マスコミ等においての講演を通し、内観普及に努める。
- 平成 9 年（1997） 4 月、瞑想の森内観研修所所長を清水康弘に譲り、同会長に就任
- 平成 1 2 年（2000） 1 月30日、享年70才（満69才）にて死亡。

柳田鶴声先生

昭和薬科大学名誉教授 楠 正三

平成一二年一月三〇日、柳田鶴声先生は富美夫人ご家族と清水康弘様ご家族に見守られて永久の眠りにつかれました。

思えば、昭和五二年四月、私は日本橋の希望クラブで、先生とはじめてお会いしたのでした。あれからすでに四半世紀、先生には本当に温かいお付き合いをいただきました。当時の先生はある商品相場を扱う会社の専務取締役でした。私はヨーガの勉強会で先生にお会いしたのでした。しかし、先生はこの時すでにヨーガよりも内観法に強いご関心を向けておられました。

前年の昭和五十一年に、先生は吉本伊信先生の主催される内観研修所で第一回目の集中内観を

行い、わずか一回の内観体験で直ちに希望クラブを創られて、内観面接にヨーガの練習会を加えられました。私はヨーガのご縁で希望クラブに参加したのでした。外村先生というご高齢のヨーガ師がおられました。

先生はお付き合いの広い方で、ヨーガ会には菌医者さん、布団屋さん、サラリーマンと個性豊かな人々が大勢集まっておられました。若い石井光先生も参加しておられました。私は『内観法入門』や『日常内観』を出版した頃で、大学では学生の記録内観をはじめていました。内観とヨーガを組み合わせるといふ点で、柳田先生は私に共鳴してくださいました。

ヨーガの指導は専門の先生が居られるときはその先生が、居られないときは代理人が、誰でも好きなように指導する、代理人もいない時は銘々が自由に足腰を伸ばすといった風でした。

昭和五十三年六月、第一回日本内観学会が京都で開催された時、先生はご自分の内観体験と日

常内観のやり方をご発表になりました。若くして逝かれた先生のお母様に対する内観と知恵遅れのご長男様に対する内観は大変感銘深く、多くの聴衆が感動しました。先生の日常内観は、会社を経営しながら、内観研修所を運営しているという大変お忙しい中での日常内観です。先生の内観に賭けた気迫のいかに強いものであったかがわかりました。

やがて希望クラブでも、皆さんが内観するようになりました。六畳二間に低い屏風を立てて数名の方が内観されました。先生は内観に対しては非常に積極的で、少しでも可能性があれば直ちに実行するという構えでした。常に人に先立って相手が満足されるようなお膳立てをされました。そして先生は暇を作ってはヨーガにも参加されました。おかげで私のヨーガも、昭和五四年一月までお世話になりましたが、その間に一通りの技法を学ぶことができました。

昭和五六年、先生は会社社長の地位を人に譲

り、栃木県喜連川に瞑想の森内観研修所を設立されました。開所祝いの日には、日本内観学会の設立に関わった人々が大勢参加して、盛大にお祝いをしました。都会の研修所とは一味違う山奥の研修所は一体どんな内観者が来られるのか。私達は非常に強い興味と関心を持ちました。

昭和六三年第一一回日本内観学会大会が喜連川温泉で開催されたとき、先生は私を大会長に指名してくださいました。会場の整備一切を先生が取り仕切って、大勢の内観者が協力してくださいました。おかげで、私はスムーズに心置きなく大会を運営することができました。本当に嬉しかったです。

先生のご厚情を静かに思い浮かべますと、次々に心のこもった先生のご配慮のほどが偲ばれて、筆を止めることができませぬ。私は先生こそ、この世に内観するために生まれた方だと思います。吉本先生の研修所で内観すると、直ちに内観研修所を開き、自らは日常内観を続け、

立派な後継者を育てながら、多くの方々の内観指導を最後までやめませんでした。

思うに、先生は神世に伝えられます「根ノ堅ス国」はスサノオ神の化身ではないでしょうか。

「根ノ堅ス国」は大国主神が修行したところと伝えられ、ここには今もスサノオ神が居られるはずで。日本の二〇世紀があまりにも荒れましたから、スサノオ神が黙視できずに化身となって生まれてこられたのかも知れません。「根ノ堅ス国」は「常世ノ国」ですね。「常世ノ国」は日本の極楽です。

あなたがお育てになりました、後継者の清水康弘様は奥様ともども立派に研修所を運営しておられます。

どうかこれからは「常世ノ国」から瞑想の森と私達がますます内観を深められますように見守ってください。

先生のご冥福を心より祈念申し上げます。



それでいいんだよ

喜びの会事務局 清水 志津子

生涯の師と仰ぐ柳田鶴声先生とご縁をいただいたのは、瞑想の森内観研修所で主人に次いで内観させていただいた昭和五七年六月でした。

初めてお目にかかった時の先生は、眼光炯々として、私の腹の底まで見据えられているような心地がいたしました。しかしそれは、恐ろしいというよりもむしろ非常に興味深く大変魅力を感じることでありました。あの日から一八年、内観の法座で、面接の現場で、思い上がっている時「まだまだだね」、自己嫌悪に苛まれている時「それがあなただ」と、静かな厳しいお声と共に、その眼に育てていただいて参りました。今の私の喜びを思うとき、ただただ有り難い気

持ちでいっぱいです。

今は大きな池になって鯉が泳いでいるところが、以前は水飲み場でした。簡単な樋が流れる水を受け、そこにコップを用意して、よく先生は内観者の方に水を飲んでいただいています。水は透明で甘く、とても美味しいものでした。心病む人、心の疲れた人達は、周りの木々からこぼれる光の中で、その水をいただき、ほっとしたものです。水源を見せていただいたことがありましたが、藪をかき分け茂る枝を払いながら入っていくところでした。水源を探し当て、その水を引き、そこまでの小道を作るのも、全部ご自分の手でなさいました。ご苦労など何処吹く風、内観者の笑顔に「美味しいでしょう」と、嬉しそうにそうおっしゃるだけでした。

内観者にお出しする食材の野菜や果物は、出来るかぎり先生と奥様で作っておられました。「カボチャはね、こうやって作ると美味しいんだよ」大きく丸く土を盛り、真ん中に二つ三つ

種を埋めます。その周りに、種からはだいぶ離れてぐるりと深い溝を掘り、「ここは何をするのでしよう」と言いながら、肥溜めに落とされたい内観者の糞尿を肥桶に入れ、大切そうに担いできては流し込んでおられました。少しでも内観者に美味しいものをと、暗くなるまで次々とカボチャの畑を作る先生の額は汗で光っておりました。お手伝いをしようとしても「これは僕がやることだよ」と、ニコニコと断られました。

先生が畑仕事をしている時に、内観される方がみえられ、「柳田鶴声先生はご在宅でしょうか」と問われたので、事務所でお待ちくださいと言つて、後から入つていって「私が柳田です」と挨拶したら、その方はビックリしてたよと、おかしそうに話されていました。その人は私が白い髭を生やして袴でも履いているとも思つたのかね、とおっしゃっていました。また「私は、悟りを開きたいと思ひ、修行をしてきた。更に修行を深めたく、知人に柳田鶴声先生を紹介

介されて来たのだが、此処はどんな修行するのですか」という方がみえたことがありました。先生が「此処は、悟りを開くなどという立派なことをするとろろではなく、自分は何者かというところを知る、本当に初歩的なことをする場所です」と言つて、内観についてご説明されたら「此処は私の来るところではなかった」とおっしゃつてお帰りになりました。飾り気が少しも無く、時には茶目つ氣たつぷりに、しかしその中にはいつも真摯なお姿がありました。

面接をしていただいている時に、又たまたま傍らで面接のお姿を拝した時、そこには一つの先生の世界がありました。内観者と屏風と先生とが一体となつて、あ・うんの呼吸といひますか、それが非常に自然で、先生も内観者も共に在るべきところにピタリと収まつて、その時の先生のお姿は、昇華された芸術のように神々しいものであります。

「この瞑想の森は僕が作ったんじゃない。みんな

なが作ってください」たんだよ」「内観者様はご主人様。僕は下僕です」何百遍お聞きした言葉でしょうか。先生の心からのお言葉でした。

先生は面接者として、瞑想の森内観研修所で八千名を超す内観者を面接し、救ってこられました。内観をした方は八千余名ではありませんが、その方々のご家族・友人・知人は、数万人に上ることでしょう。悩み苦しんでおられたのは、一人内観者ばかりではなかったはずです。その人の子・孫・関わっていく方々の未来をも思うとき、先生が救われた方の数は限りなく広がっていくことでしょう。

又、先生は一人内観者として、非常に深い内観をされた方でもありました。やはりそれは、先生が幼い時から、死を非常に身近に感じてこられた、死を見つめて生きる人生であったことが大きな要因ではなかったかと思っております。兄弟七人は、幼くして死産・夭折され、お母様を一一歳、お父様を一六歳の時に亡くされ、残

ったお兄様とお妹様も、先生よりもずっと若い歳で亡くなられています。何時それが自分であってもおかしくない状況の中で、一時はそのお身体に四〇を超す病名が付いたこともありました。先生の死への不安・恐怖はいかばかりでしたでしょうか。

そのような時に出合った、無常をとりつめ死をとりつめる内観は、まさに先生にとってどんぴしゃりのものであったと思われれます。内観で先生は、どんなに救われたことでしょう。そして今から一〇年前、先生はC型肝炎に罹られました。医師の話では、若い時に手術された際の輸血が原因であろうとのことでした。何時の日か、肝炎から肝硬変になり肝癌で死ぬことを、先生はその時から既にわかっておられました。「昨日までは五メートル駆けて行けた。今日は二メートルしか駆けられない新しい自分を発見したよ」とニコニコとおっしゃったことがありました。亡くなられる半年前、「僕はどうもこ

こいら辺らしいよ」と指された本のページには「生存率一五%」のところに赤線が引かれています。「今僕が受けている治療から見ると、ただどね」胸が締めつけられるような思いで見上げたお顔には、いつもの穏やかな優しい微笑みがありました。衰えゆく身体、確実に近づく死を先生は静かに淡々ととらえ、見つめてこられました。恐怖も不安も微塵も感じられませんでした。そして、ご最期のその刻まで、いつも先生がおっしゃられていた言葉そのままに、限られた日々の一瞬一瞬を、全智全能全生命力を掛けて生き切られました。

先生は「生命は二つある。一つは、肉体と共に滅びる生命。そして今一つは、永遠に生きる生命だよ」とおっしゃっておられました。先生が亡くなられた今、まったく私は先生を失った感じがしません。瞑想の森内観研修所の隅々に、先生の熱い生命を感じるからです。次々といったくお電話やお手紙に、皆様の心の中に、先生

の魂が息づいているのを実感させていただくからです。先生の慈愛の眼差しは、これからも沢山の方の心に甦り、その魂をやすらぎへと導かれることでしょう。

「それでいいんだよ」いつもの先生の温かいお声が心の中で響いています。

柳田鶴声先生語録より

- ・人は、他人に善を求めて苦しみ、
- 人は、己の悪を認めてやすらぐ
- ・花は光明に向かって咲き、
- 根は暗黒に向かって伸びる
- 根を見ずして花を語るなかれ
- ・忘却とは、人の心を踏みにじること
- ・全智・全能・全生命力を掛けて、
- この一瞬を生き切る
- ・出会いは別れであり、別れは死であり、
- 死は永遠である

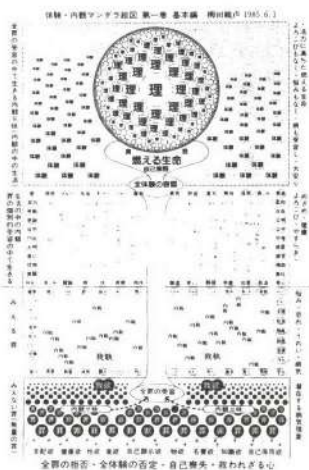
曼陀羅の世界



脳力開発研究所 志賀一雅

先般、柳田先生を偲ぶ会が催され、いろいろな立場の方からの思い出話を聞くことができました。いまさらですが、先生がいかに多くの人の心を癒し、希望と夢を与えてこられたか、胸に染み入る思いでした。私も先生から多くのことを学ばせていただきました。

初めて先生にお会いしたのは、平成六年一月二五日から始まる集中内観に参加したときでした。以前から、柳田先生の「内観」を体験するといよいよ、ということ聞いてはいましたが都合がつかず延び延びになっていました。ところが先生は体調を崩され、今年が最後になるかも知れないという噂が耳に入り、年末に都合を



つけて参加したわけです。

社員研修やスポーツ選手のメンタルトレーニングを引き受け、自己啓発セミナーを開催してい

る立場から、いかに集中力を高めるかが課題で、「内観」は大いに参考になります。したがって参加の動機は「内観」とはどういうものなのか、その目的と方法、どのような成果が期待できるのかを、体験を通じて観察することでした。ですから、私の初めての「内観」は、形こそ言われた通りにやりましたが、常に分析的で醒めており、深い「内観」になりませんでした。そのことを柳田先生に見抜かれ、四日目に厳しく指摘されました。

集中内観が終わってから、先生が主宰された

自己啓発セミナーや希望クラブのできごと、ヨガや座禅の瞑想、自強術や氣功法などの体験談、そして最終的に「内観」に帰着したことなど、それはそれはたくさんの話を聞かせていただきました。自宅への帰路、除夜の鐘を耳にし、印象に残る先生の言葉を噛みしめながら歩いたことが思い出されます。除夜の鐘の音が、もう一度しっかりと「内観」をやり直しなさい……と促しているように聞こえて、翌年の夏に再び集中内観を受けさせていただくことにしました。

私は医者ではありませんが、長いこと脳波の研究をしてきました。健康な人の、より健康な状態、頭が冴えていいアイディアの出ているとき、手を器用に動かして上手に作り、体をリズムカルに動かしてうまく表現しているときの脳波を観察してきました。

例えば、将棋の米長邦雄氏が詰め将棋の問題を解いているとき、記憶力世界一の友寄英哲氏が記憶回想しているとき、音楽家やスポーツ選

手など、さまざまな分野の能力者が得意な能力を発揮している時の脳波を測らせてもらいました。そして、能力者が集中してすばらしい能力が発揮されているときは例外なく強いアルファ波が観察されたのです。

私達の体は細胞でできており、その細胞の状態や動きは脳でコントロールしています。脳からいい信号が出れば細胞はうまく働き、自ずと健康で、知恵や力が出て、すばらしい能力が発揮されるはずで、脳は電氣的に活動していますから、その様子を脳波で観察することができます。脳波にアルファ波の成分が多ければメンタル（心）にもフィジカル（体）にも集中し、すばらしい能力が発揮できます。シータ波の成分が多ければスピリチュアルな感受性が高まり悟りに近い境地を体験することができます。

ですから、「内観」に集中して、心も体も劇的な変化が起きれば、脳波にもそれが現れ、いかにしたら「内観」に集中できるかの条件を見

つけ出すことができるかも知れません。そのことを柳田先生に相談したところ、とにかく実験してみたらと、快くお許しいただき、研究所のスタッフ三人の脳波を測ることができました。

測定結果は日本内観学会に報告しましたが、

初日から三日目までは三人ともベータ波が優勢で脳波は乱れ、注目すべき変化は観察できませんでした。あまり被験者に負担をかけますと、「内観」ができませんから、面接後の一時間だけ脳波を測りながら「内観」することとし、睡眠中の脳波も計測することにしました。簡単な日記をつけてもらいましたが、屏風の落書きと同じように、「所長を恨みます」「こんなところに来るのではなかった」と苦悩が書き込まれ屏風の中の生活がかなり苦痛のようでした。

ところが四日目以降、脳波はときどきアルファ波となり、最終日には強いシータ波まで現れました。それに呼応して日記には「お母さんありがとう」「お兄さんごめんさい」「ここに来

てよかった。所長に感謝！」と書かれており「内観」の深まったことが伺われます。アルファ波が現れ出してから、屏風の中が苦痛に感じることではなく、むしろ居心地のいい空間になったようです。

日常と違う環境に身を置きますと、脳はその環境に順応できるように働きますが、多少の間がかかり、それまでは居心地が悪く感じ、脳波も乱れますが、徐々に適応してくると、脳波も安定してきてアルファ波が現れるものと思われれます。そのことを柳田先生に報告しますと、「ニコニコされながら」「そうでしょう。そのはずですよ」と、実験結果を予測していたかのような自信満々の面持ちでした。「だから、どうしても一週間は必要ですよ」と強調されていました。「時間がかかり、不合理なようだけど、実に合理的にできています」とも言われていたが、脳波観察からも、なるほどと思われる変化だったのです。

昨年、手術される前に先生に呼ばれ、自治医大へ見舞いに伺ったとき、ことのほかお元気で、いろいろな話を聞かせていただきました。枕元に置いてある大切な資料の中から一枚、直筆の曼陀羅を取り出されて、それをしみじみと眺めながら、「内観が深まるとね、この曼陀羅が浮かぶんですよ……」と嬉しそうに語られています。それは仏教の曼陀羅ではなく、柳田流の曼陀羅なのです。

先生は、よくこの曼陀羅を示しながら話をされ、随分配慮された人生模様だなあと感心して見ていたのですが、実は考えたのではなく「内観」しているときに浮かんだのだそうです。内観が深まると、価値観や人生観、世界観が浮かんでくる。思索の果てではなく、我執を捨て、無我三昧に耽っていると、彷彿と湧き出てくる世界のようなのです。

脳波で言うところのシータ波が優勢になる状態かも知れませんが、スピリチュアルな感覚が目覚める

のです。一般にシータ波は浅い睡眠のときに観察される脳波ですから、凡人には睡眠の脳波ですが、「深い内観」に到達した人には悟りの脳波と言ってもいいのかも知れません。

一週間の「内観」は、脳波という切り口で見ると人生の縮図のような気がします。初めの段階ではひたすら環境に順応するように働いて、ベータ波からアルファ波へ移行し、順応できると、今度は喜びと感謝、感動を探し出して、強いアルファ波で共鳴し、やがて生かされていることに気づいたとき、シータ波が強くなって、価値観や人生観、世界観が曼陀羅の如く浮かび上がってくる……。柳田先生の話の伺いながら、そんな思いを抱きました。



魂の響き合同会

（柳田鶴声先生を偲ぶ会より）

瞑想の森内観研修所所長 清水 康弘

去る平成一二年三月一二日の日曜日、瞑想の森内観研修所会長の故柳田鶴声先生を偲ぶ会がJR新横浜駅前の新横浜総合斎場にて行われました。

当日は朝から小雨がしとしとと降り、まるで柳田先生の死を悼むかのようでした。

全国から二二八名の大勢の柳田先生ゆかりの方々がご臨席くださいました。

偲ぶ会は午後一時から始まりました。

一階のフロアで受付を済ませると、二階の大斎場へと進み、柳田先生の遺影の置かれた祭壇でお焼香をして席に着く方々が、次第に巨大な



会場を埋めていきました。青山学院大学法学部教授の石井光先生が開会の辞を述べられ、柳田先生のもとに集まった我々の心を代表するお言葉をくださいました。

一時三〇分からプログラムは「柳田鶴声先生との思い出を語る」へと進みました。

柳田先生の学生時代からのご友人をはじめ、実業家時代の交友関係、おはこ会や希望クラブ等の先生の作られた様々なグループの関係者、日本内観学会や喜びの会等の内観関係者、そして先生が残された至宝ともいえる、瞑想の森内観研修所で先生と出会われた八〇〇〇名を超える内観者の皆さま……。それぞれを代表する一四名の方々が、柳田先生とのエピソードを語ってくださいました。

日本内観学会会長である指宿竹元病院院長の

竹元隆洋先生。富士短期大学時代のご友人で、元法務省矯正局の伊藤博義先生。おはこ（十八番）会時代のご友人で、柳田先生が内観するきっかけを作られた白石忠男先生。希望クラブと共に創設された、四五年来のご友人の親松徳二先生。（株）くらしの友グループ会長で、先生が（株）小林洋行社長時代のご友人である伴和夫会長。瞑想の森で内観を体験され、月一五回を超える講演活動を通して内観の普及にご尽力されている作家の神渡良平先生。脳力開発研究所所長・徳島大学工学部講師であり、ご自身の瞑想の森での内観体験を脳波研究に活かし、毎夏瞑想の森で行われる特別内観研修会では面接者としてお手伝いをなさっている志賀一雅先生。各先生方がそれぞれの飾らないお気持ちを語ってくださいました。

大正大学人間学部教授であり、先生のご親友故村瀬孝雄先生の奥様でもある村瀬嘉代子先生は、当日ご体調を崩されてご欠席でした。

そして、前半の最後として、音楽家関口仁先生の和太鼓の演奏がありました。関口先生は、シンセサイザー奏者として喜多郎と活動を共にされて、様々な楽器演奏でご活躍されている内観体験者です。関口先生の繰り返り出す撥の一打ち一打ちが静まり返った場内に鳴り響き、その言葉を越えた柳田先生への想いは、参列した我々の身体を貫くほどに深く激しいものでした。

一〇分ほどの小休止の間、会場のスクリーンに柳田先生の講演が映し出されました。この講演のビデオは、ご出席の皆さまに記念品として配られました。また、二階会場正面入口前には先生の遺品コーナーが設けられ、先生が内観のイメージを描かれた数多くの心象画をはじめ、先生のご著書、愛用の作務衣、思い出の写真等



の数々が陳列され、生前のお姿が懐かしく思い起こされました。

後半も柳田先生ゆかりの方々が、沢山のエピソードをお話しになりました。

日本内観学会副会長であり、大阪大学人間科学部教授の三木善彦先生。同じく日本内観学会副会長であり、青山学院大学法学部教授の石井光先生。日本内観学会常任委員であり、信州大学医学部精神科教授の巽信夫先生。日本内観学会常任委員であり、白金台内観研修所所長の本山陽一先生。瞑想の森の人工洞窟にて一二日間の断食を含め、延べ二九日間の記録的な内観をされた福井孝司さん。同じく瞑想の森にて十数回にわたり集中内観を繰り返しなされた元教師の後藤楚子さん。

そして最後に、中林サチ子先生によるフラダンスが披露されました。中林先生はハワイを中心として活動され、フラダンスの世界大会にも出場され、ハワイ州政府の文化使節としてオー



ストラリアに派遣されているという内観体験者です。中林先生は、透き通るような神聖さと死者を悼む哀しみをこめて、しなやかにそして力強く舞い、柳田先生の魂を静かに送られました。

閉会の辞を私が述べさせていただいた時、時刻はすでに四時三〇分をまわっておりましたが、時の経過を全く感じられませんでした。それぞれの方がそれぞれの立場で語られた柳田先生への思いが、参列者お一人お一人の心の中にある柳田先生を甦らせ、皆さまの魂が共鳴しひとつになつて柳田先生を送ることができたからなのでしょう。その後は、会場を別の階に移し、会食をしながらの懇談会となりました。

「この歳になると、いろんな偉い人の偲ぶ会

に出させていただくが、これほどまでに素晴らしい会はなかった」という東洋大学名誉教授の恩田彰先生のお言葉に象徴されるように、莊嚴で、それでいて心温まる、とても素晴らしい会になりました。

これも柳田先生の御遺徳と、御来臨の皆さまの柳田先生を想う御心によるものだと深く感じました。

柳田先生のお心は永遠に

今から約一年半程前、いつもの定期検査の結果、先生の肝臓に影があることがわかりました。以前からご自身の病状を正面から受け止められておられたからでしょう、精密検査の結果を聞くために自治医大まで行くとき、「どうやら今回は大事だから、あんた一緒に来てください」と言われました。

お医者様は病名はおっしゃいませんでしたが、柳田先生ははっきりと自覚されたようでした。

帰る道すがら一言「いよいよ最期の戦いになりますね」とおっしゃいました。

先生は痛みや辛さを決して表には出しませんでした。まだ私が瞑想の森に来て間もない頃、顔をしかめて「痛い」という仕草をされたことがあり、「先生、どこか痛いんですか」と訊ねますと、「僕には二四時間、頭と背中に鈍痛があるんだよ」と言われました。こちらが先生が病気であることを忘れるくらいに、いつも明るく穏やかなお顔でした。そしてそのお顔は最期の日まで続きました。

私も、瞑想の森で初めて内観と出合ってから一四年、柳田先生の元でご指導をいただくようになりましてから五年になります。内観も面接もやっと入口に立たせていただいた未熟者でございますが、師の御足跡を慕い、精進を重ね、微力ながらも御遺志を継いでいきたいと願っております。